

韓国のパプリカ農場

パプリカ（ジャンボピーマン）は、普通のピーマンが30g程度であるのに対し150g以上と大型で、色も赤、黄、黒、オレンジ等多彩である。わが国では1990年代にオランダから輸入が開始されて以降、そのファッションブルなところが人気を集め、急速に国内需要と輸入が拡大してきている。近年は韓国からの輸入が増えて第一位の輸入国となり、2002年にはわが国のジャンボピーマン輸入量22,465トンのうち韓国からの輸入が54.7%を占めるに至っている。

韓国では、農産物市場開放が進んだ1990年代に、輸出競争力の強化を農政の柱の一つに据え、施設園芸野菜の振興等に力を入れた。日本へのパプリカ輸出の増加は、そのような取組みの結果である。わが国では、ヨーロッパと比べてパプリカの消費規模はけた違いに小さいのであるが、その急速な伸びから、韓国から日本への輸出野菜の代表格としてとり

あげられることが多い。

筆者は本年1月、韓国農協中央会にご紹介いただきパプリカ生産農場H営農法人を訪問する機会を得たので、ここでその概要についてとりまとめる。

訪問した農場は首都圏である京畿道にあり、ソウルから南方約60kmに位置する。

5名で構成する法人形態をとっているが、実質的には代表1人で切り盛りしている。

以前から花き栽培を長く行っていた代表は、1994年にオランダを訪問し、ヨーロッパでパプリカ生産が盛んなことから今後の成長作目であると考え、韓国での事業化を決意し、1997年から栽培を開始した。韓国での本格的なパプリカ栽培としては最初ではないかとのことであった。

温室面積は約8千坪で、オランダ製の広いガラス温室は壮観である。このような温室の建築費用は坪当たり10～20万円といわれ、普通の農家では負担できない巨額の投資となるが、ウルグアイ・ラウンド対策での長期・低利融資も活用して実現したのだという。

栽培方法は溶液栽培で、温度はコンピューターによって管理されている。省力化され整然とした清潔な温室は印象的であった。

パプリカは年中連作が可能で、播種後約4か月経過後、育成状況を見て出荷する。冬



期は日照が少なく生産量は減少し、4～7月が生産の最盛期となる。通常パプリカの色は7～8種類といわれるが、当農場では12種類の色のパプリカを生産している。また、天敵を導入して無農薬栽培も行うようになった。

従業員は平均15人程度を雇用している。近くにKIAの自動車工場および協力工場があり、その従業員の家族等が多いが、東南アジアからの労働者も雇用している。

年間約600トンのパプリカを生産、うち、日本への輸出が400トン、国内向けが200トンである。最近是国内の消費が堅調で国内向けの価格が日本向けを上回るようになっており、国内向け出荷が増加して輸出向けが不足気味である。

販売は、当初は大手国際資本との契約出荷をしていたが、現在は契約にしばられず、価格・条件のよいところに個別に出荷している。価格は、季節により異なり、その都度交渉して決定する。

今後についても極めて意欲的である。品質面ではオランダ産に遜色ないものが生産できしており、また、日本市場に近いという地理的優位があることが強みである。そして、ビタミンCが豊富で繊維質に富む等健康志向に合うことから、日本や中国の需要は今後大きな伸びが期待できるとして、規模拡大への意欲も大きいように思われた。とくに最近、中国で需要が大きく伸びつつあるようである。



ただし、このようなガラス温室によるパプリカ生産が今後韓国で大きく増加することは、難しいとみているようである。巨額の投資を必要とする一方で、韓国の農業者は1990年代以降、負債額が急激に増加しており、設備投資負担に耐えられる経営は限られている。すでに触れたとおり、韓国では施設園芸の拡大に力を入れてきたが、ガラスハウスは一部であり、一般的なビニールハウスでは、パプリカを栽培しても品質管理が難しいとのことであった。

韓国では、施設園芸農家の負債問題が深刻であるが、本法人のように、将来を見越し、日本や中国など広い範囲の市場動向をつかみながら積極的な事業を展開している法人のエネルギーを感じさせられたことは、貴重な体験であった。

なお、韓国農業全般については、『農林金融』2004年7月号に詳述しているので、あわせて参照いただきたい。

(石田信隆)